生命工学科

生息数約100つがい。
北海道を象徴するシマフクロウを
絶滅させず次の世代へと引き継ぐために。

【研究テーマ】 絶滅危惧種シマフクロウの生態と保全

【キーワード】絶滅危惧種

研究

**生態を解明し
保全に貢献できるように
生息地での調査・研究や
普及・啓蒙を進めています。**



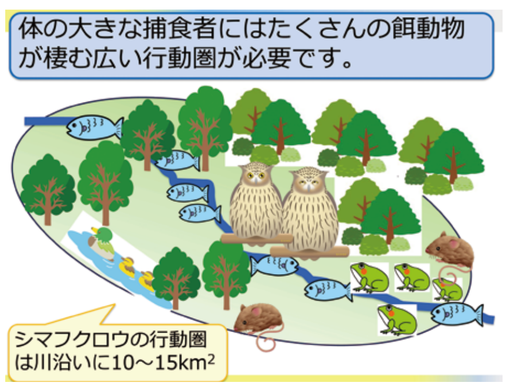
カメラや電波発信器を活用して生態を調査

シマフクロウは、日本では北海道のみに分布する絶滅危惧鳥類種です。減少した大きな要因は川の環境悪化で主食の魚が減少したこと、子育てに必要な大木が森林伐採で失われたことで、現在、北海道に生息しているのは約100つがい。私の研究は、シマフクロウの生態を解明し、その保全に貢献することです。個体数が少ない猛禽類ですから、都市に暮らす人には身近な存在ではありませんが、北海道を象徴する「コタンコロカムイ」（アイヌ語で集落を守る神の意味）を絶滅させず次の世代へと引き継いでいくことは、私たち北海道民の責務だと思っています。そこで、私は主に十勝川上流域の生息地で生態研究を続けています。シマフクロウは繁殖ペアが広い行動圏を持ち、年間を通して定住しています。調査地の個体に足環を付けて動向を長年、調査することで基礎的な生活史を解明してきました。繁殖巣にカメラを設置し、繁殖時期、産卵数、抱卵期間、親からヒナへの給餌内容・餌量などを詳細に調査。また、小型の電波発信器を装着して行動圏や環境利用なども調べてきました。

研究成果が野生生物保護管理政策を動かしていく

シマフクロウは生態自体が興味深く、研究していて飽きることはありませんが、最大の面白さは研究成果が絶滅危惧生物の保全に直接貢献できることです。野生動物の保全は、結局のところ人を相手にする応用学問分野のため思い通りにならないことも多いのですが、研究成果が行政の野生生物保護管理政策を動かし、絶滅のリスクを少しずつ減らせるやりがいは大きい。近年は、シマフクロウの生態を多くの人に知ってもらうため、繁殖巣のライブ配信など普及・啓蒙にも力を入れています。







授業

環境生物科学I

**生物や生態系にヒトが
与えている影響について学びます。**



「環境生物科学セミナー」での
鳥類観察

野生動物とどう付き合っていけばいいか考えてみよう

自然環境と生物の相互関係を理解した上で、ヒトが地球上の生物および生態系に与えている影響を学びます。今や多くの生き物が絶滅したり絶滅の危機にありますが、それはすべて人類が引き起こしていることで、人類が何をすることでどんなことが起こるのかを知ってもらいます。特に、北海道の野生生物を数多く素材として取り上げ、私たちの暮らしが彼らに与えている影響を理解し、問題が拡大している野生動物との軋轢を軽減するための方策について学生が自ら考える力を養うことを目指します。これから先、私たちは野生動物とどう付き合っていけばいいのか。正解はないかもしれないけれど、関心を持ち、考えてみてほしい。そのために、図表や写真、動画資料などを活用し、理解を深めていきます。



工学部生命工学科
教授
早矢仕（はやし） 有子（ゆうこ）

生き物の根源は細胞で、それが寄り集まって個体となり、さらにその上のレベルに生態系があります。生命を知るには、その全体を知ることが必要です。シマフクロウに興味を持ってほしいのはもちろんですが、まず身近な生き物から関心を広げていってほしいと思います。

〈専門分野〉
保全生物学（鳥類）

〈主な担当科目〉
生物多様性論、環境生物科学